

子育て世帯支援に助成

光と愛の事業団 福島の団体へ

読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」の助成先として、福島市入江町の「第三地区子ども居場所づくり実行委員会」が選ばれ、18万円が贈られた。新型コロナウイルス対策を工夫しながら、子育て世帯それぞれに適した支援を続けている。

各家庭の事情くみ活動

「育ち盛りの子どもが2人いるので、食料の支援は本当に助かる。幕田さんと話をすると気持ちも軽くなる」。食料支援を受ける女性性は、自宅アパートの玄関で同会副会長の幕田由美子さん(61)に笑顔で話しかけ



食料支援を受ける女性と笑顔で話す幕田さん(23日、福島市で)

た。女性は夜勤の介護職員として働きながら、高校3年の息子と中学3年の娘を一人で育てているという。同会は2019年、市立福島第三小学校学区内の世帯向けの「子ども食堂」を開くために設立された。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、現在は食料を各家庭に無料で配る「フードパントリー」に活動を切り替えている。25人のボランティアが参加し、支援対象の親子との関わりを大切にしながら、それぞれの家庭の事情をくんだ支援に努める。

支援先の家まで足を運ぶことで、その家庭が何を必要としているかを把握しやすくなった。実際、食料支援の申し込みを受けて家に行く、家具や家電がそろっていないため、物品

を同時に提供したケースもある。活動の根っこには支援先と誠実に向き合う姿勢があり、ボランティアは親子の笑顔や子どもの成長を見て、こちらが元気をもらっているエピソードもある。毎月第4土曜日には、地元の子育て家庭であれば参加できるイベント「第三地区ふれあい広場」を開催。遊びや学びの場を提供し、親子の交流を促している。今月24日のイベントでは学習相談、災害対策の重要性を伝える寸劇、サッカーなどが行われ、4世帯の親子が体を動かしながら交流を深めた。母と妹と一緒に来た福島第三小2年の松田明咲さん(7)は「お母さんや普段関わりのない地域の子と遊ぶのは楽しい」と笑顔で体育館を駆け回った。

「家族まるごと支援することが必要。子どもが健やかに育つことができる環境をつくりたい」。同会は子どもの居場所にとどまらず、親子の居場所づくりのために活動を続けていく。

渋川のNPOに助成金

読売光と愛 困窮児童らの学習支援へ



児童らにローラースケートを教える小松さん（奥）（渋川市で）

子どもたちの育成に取り組み団体を支援するため、読売光と愛の事業団が創設した「子ども育成支援事業」の助成団体に、渋川市のNPO法人「渋川いきいき健康スポーツクラブ」が選ばれた。

同クラブは2013年、子どもの居場所作りを目的に設立され、退職した元教員らが遊びや健康づ

くりの教室を開いている。最近毎月1回、渋川市石原の山林内に整備した1周約120分の運動広場で、約30人を対象にローラースケートやミニサッカーなどを指導している。

助成金は30万円で、同クラブは困窮世帯の児童らを対象にした学習支援に充てる予定だ。今秋から市中心部で、小学1〜6年を対象にした学習支援教室を無料で始める。毎週金曜の放課後に宿題や予習、復習の指導をしたり、工作など自由学習を手伝ったりする計画だ。子ども食堂の開設も検討している。

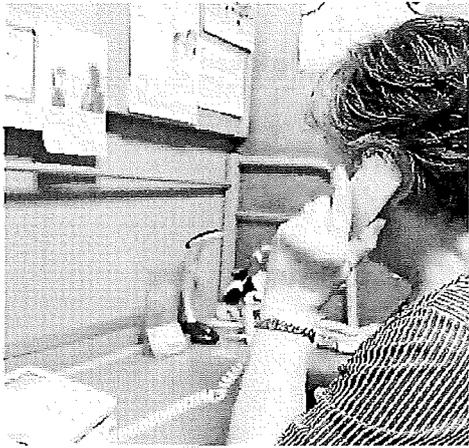
理事長で元小学校教諭の小松秀司さん(72)は「家庭の事情で勉強しにくい環境にあり、授業についていけない子を見つけた。子どもが自立するうえでハンデを背負わないように、支援していきたい」と話している。

(第3種郵便物認可)

LUZZL 4 (10) 4 (10) 4 (10) 4 (10) 4 (10) (小唯口)

子や親電話で悩み相談

子どもたちの育成に取り組む団体を支援するため、読売光と愛の事業団が創設した「子ども育成支援事業」の助成団体に、千葉市のNPO法人「子ども劇場千葉県センター」が選ばれた。県センターは「チャイルドライン千葉」と「ママパパラインちば」を運営し、悩みを抱える子どもたちや親の相談に乗っている。



ボランティアが日々、子どもたちの悩みに耳を傾けている（千葉市で）

千葉のNPO「光と愛の事業団」助成

「つらかったね」「よかったらもう少し話してみてくれるかな」
千葉市内の活動拠点では、チャイルドライン千葉のボランティアたちが、受話器の向こうから聞こえてくる子どもたちの悩みに耳を傾けていた。チャイルドラインは全国組織で、県センターには県外の小中高年生からも電話がかかってくる。
子どもたちが打ち明ける悩みは、「嫌いな食べ物をどうやったら食べられるようになるか」といったものから、「いじめられていて自殺したい」といったものまで幅広い。ボランティアはその一つ一つに丁寧に対

応する。
担当者は「共感しながら様々な話を聞いていく。心の中にある考えを引き出し、すっきりしてもらおう」とが大切」と話す。
県センターは1988年に前身組織が発足した。30年以上にわたり、県内でチャイルドラインや子ども向けの文化事業などに取り組んできた。
新型コロナウイルスの感染が拡大して以降、着信件数は増加傾向にあり、2021年度は6005件に上った。「死にたい」「消えたい」といった死を願う相談内容も増えているという。
命にかかわる深刻な悩みに向き合うことも多いため、県センターでは20時間の研修を義務づけ、元弁護士が新人ボランティアに講義を行っている。助成金は、そうした研修に充て

られるという。
県センターでチャイルドラインを担当する中村幸恵理事(72)は「相手に寄り添い、悩みや不安を解消する手伝いをこれからも続けていきたい」と話している。

◇
チャイルドラインは毎日午後4～9時。☎0120・99・7777。ママパパラインちばは毎週金曜午前10時～午後4時。☎043・204・9390。

県内青果市況
市場ごとの価格の前の丸数字などは昼目

青果市況	千	葉	木更	津	子
(キロ当たり)	(8)	(中)	(8)	(中)	(中)
ダイコン	173	140	238	216	1500
コシウ	234	216	346	324	1000
シシトウ	351	—	405	130	—
ニンジン	—	—	140	86	600
コシ	—	173	130	54	100
ロケ	—	—	108	108	600
モイ	216	—	162	59	—
ベツ	108	—	648	716	—
ツキ	151	—	—	—	—
ネギ	475	—	—	—	—
長ネギ	—	—	—	—	—
コロ	—	—	—	—	—

光と愛の事業団

子どもも育成 2団体助成

子どもたちの健やかな成長を支える活動に取り組み団体を支援するため、読売光と愛の事業団が創設した「子どもも育成支援事業」の助成団体に今年度、都内からは子ども食堂などを営む「あじさいの集い富士見」(板橋区)と、フリースクールなどを運営する「つるかわ子どもこもんず」(町田市)が選ばれた。

夕食提供 育児相談も

「あじさいの集い富士見」(板橋区)



手作り弁当を渡す小池さん(板橋区富十見町の「あじさいの集い富士見」)

あじさいの集い富士見では、2019年から子ども食堂「あじさいの集い富士見」を月に2回開いている。

生活に困窮するひとり親家庭や多子世帯、外国人らを中心に夕食を提供し、献立づくりや調理は

40人ほどのボランティアが交代で担当。コロナ禍では弁当づくりも始め、これまでにのべ2500人が利用した。

ボランティアは子育て経験のある女性が多く、代表の小池妙子さん(84)が自宅

不登校生徒の居場所

「つるかわ子どもこもんず」(町田市)



活動中に行った羊毛フェルトの作品を見せ合う福田代表(左)(町田市)

を開放して運営する食堂は、育児に悩む母親の相談場所や子ども居場所にもなっている。

小学生の娘と訪れた母親は「ほかの親と交流できて安心感を得られる」と感謝

し、小池さんは「子育てに悩むのはみんな一緒。食事しながら話し合い、解決の糸口が見つかればうれし」と話している。

20年からは米や野菜などの食材を無料で配る「フードパントリー」も続けており、助成金の50万円は、食料や弁当容器の購入費などに充てるといふ。

中学生を対象とした無料塾「結い」などの運営を行ってきたつるかわ子どもこもんずは今年4月、不登校の生徒が週2回活動するフリースクール「自由な学び場 SOU」を新設した。助成金の50万円はこの運営費などに使う。

定員6人のフリースクールを始めたのは、無料塾での活動を通じて、昼間の居場所がほしいという不登校の子どもの声を聞いたのがきっかけだった。今回の助成を受け、新たに4人の募集を行うという。

枝肉	28日(単位円)	高値	安値	平均
【東京・芝浦】(骨付き)	豚	661	653	617
	上中並外	629	585	617
	豚	754	752	619
等級	②	2126	2459	2342
	③	1643	1840	1877
	④	1621	1300	1446
	豚	648	540	601
【さいたま】(骨付き)	豚	648	540	601
	上中並外	636	432	556
	豚	528	324	425
【さいたま】(骨なし)				
鶏卵	JA全農	261	233	240
	キロ	262	234	240
	協利	252	224	235
L・M・S	L	247	219	230
	M	211	183	225
	S	255	113	190

どで開かれた活動には中学生3人が参加。協力農家の人から指導を受けて大根の種やプロッコリーの苗などを植えた。今後は農園にあるほうき草(コギア)を利用したほうき作りなども計画している。

「SOU」の名称は、大人が「寄り添う」、伴走する」という意味を込め、共通する「そう」からつけた。福田有美子代表(56)は「会場費や支援者の研修などに費用がかかるので、助成は助かります」と話した。

障害児一時預かり開始へ

保護者ら支援 練馬区が11月から

障害児を持つ保護者らの子育てを支援するため、練馬区は11月、同区光が丘の「子ども発達支援センター」で障害児の一時預かりサービスを始める。

区によると、1歳6か月から12歳(小学6年生)までの障害児や発達障害の可能性がある子どもを対象とし、保育士の資格を持つ職員が対応する。事前の親子面談を踏まえて利用登録を

1人親世帯支援に助成

光と愛の事業団 茅ヶ崎の市民団体に

子どもたちの健全育成を目指し、読売光と愛の事業団（東京）が創設した「子ども育成支援事業」の今年度助成団体に、県内では茅ヶ崎市の市民活動団体「地域のお茶の間研究所さろんどて」が選ばれた。

さろんどては、2012年に一人暮らしの高齢者の居場所づくりとして、民家を借りて食事を提供する活動をボランティア10人ほどで始めた。その後、「地域に孤立をつくらない」と、妊婦や赤ちゃんも支援する「フードパントリー」は19

など活動の幅を広げた。現在は、ひとり親家庭の支援にも力を入れ、シングルマザーの親子のためのカフェや、子ども食堂などを定期的に開催している。

今回の助成対象となった「フードパントリー」は19



フードパントリーの準備をする川口代表（左）（8日、茅ヶ崎市で）

年にスタートし、ひとり親家庭を中心に生活困窮の約120世帯に毎月、米やお菓子、野菜、レトルト食品

などを配布。市民や企業の寄付でまかなっているが、コロナ禍で支援を求める世帯は増加し、やりくりに苦慮しているという。今回の助成は33万円で、川口禎子代表（44）は「お互いに支え合うことを大事にしている。今回の助成も生かして、活動をしっかりと続けていきたい」と語る。

厚木市立病院 脳卒中即応に

学会が認定

厚木市立病院が、日本脳卒中学会（東京都千代田区）から地域診療の中核を担う「一次脳卒中センター」に認定された。医療機関や救急隊の要請を受けると、24時間、脳卒中患者を受け入れる。市内だけでなく、周辺自治体からも急性期脳卒中の患者も可能な限り受け入れ、血管内再開通療法など高度な治療に取り組む。市立病院によると、4月に申請し、審査を経て認定通知が8月に届いた。期間は来年3月31日まで。年度



「一次脳卒中センター」に認定された厚木市立病院（厚木市水引で）

ことの更新となる。市内では東名厚木病院に次いで2例目で、県内では藤沢市民病院や小田原市立病院、平塚市民病院、茅ヶ崎市立病院などが認定されている。厚木市立病院の長谷川節院長は「これまで以上に質の高い医療を提供していく」とコメントしている。

(第3種郵便物認可)

2022年9月29日(木) 読売新聞(朝刊) 長野2 12版 26頁

長野県

子ども宅食に助成金

読売光と愛ひとり親家庭支援のNPO

ひとり親家庭向けの「子ども宅食 えんまる便」を展開する長野市のNPO法人「えんまる」が、読売光と愛の事業団の「子ども育

成支援事業」の助成団体に選ばれた。共同代表の岩間千佳さん(44)は「SOSを出すことができない家庭に届くよう、活動を続けたい」と意気込んでいる。



企業などから集まった食材を仕分ける学生やスタッフ(21日、長野市の県立大で)

と意気込んでいる。

同NPOは、保育士として勤務経験のある岩間さんが2014年、子育て支援を目的として、夫の淳さん(48)と設立。17年には、仕事を休めない親に代わり、病気の子どもを訪問保育をする「訪問型病児保育」を始めた。

子ども宅食の開始は20年8月。病児保育の相談に訪れたひとり親家庭の母親が、利用料が払えず断念したことから、「困窮家庭の家計で特に負担の大きい食事をサポートしたい」と考えたのがきっかけだった。

企業や個人などの支援者から寄せられたレトルト食

品や米などを月1回、支援が必要な家庭に届ける。当初、配達先は2世帯だったが、現在は68世帯が利用。食品の調達には、企業や個人など100以上の支援者が支えている。

今月21日には、県立大(長野市)で、NPOのスタッフ6人とボランティアの学生11人が食品の仕分け作業をした。同大3年の中山愛梨さん(20)は「届け先の方には会えないけれど、食品を通じて、たくさんの方の思いが伝わればうれしい」と話した。

3歳の男児を育てる長野市内の20歳代の女性は、昨年冬、子ども宅食の配達車を見かけて利用するようになったという。女性は「離婚してひとり親になり、心細かった私に、『一人じゃないよ』と行動で示してくれた。経済的な面だけでなく、精神的にも支えられている」と感謝していた。

「寺子屋」事業に助成金

読売光と愛

藤枝のNPO 全国展開目指す

読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」で、藤枝市のNPO法人「Cafe de 寺子屋」が今年度の助成団体に選ばれた。大学生らがカフェで子どもに勉強を教える取り組みを進めており、助成金50万円は活動の全国展開に生かされる。



子どもたちがのびのびと学ぶ寺子屋。16日、藤枝市若王子の「寺子屋あすは」で。

団体は2020年4月、藤枝市出身の東大院生大石紗矢香さん(25)が設立した。

地域のカフェを借り、大学生を中心としたスタッフが、児童や生徒の勉強を無償で手伝う。「自学自習」と「対話」を両立しやすい環境だとして、カフェを学びの場に選ん

だ。

20年7月に第1号の寺子屋を焼津市内に開いた。その後、活動拠点は東京、神奈川、福島など計9都県14か所(今月5日時点)に広がっている。

「25年までに日本全国に寺子屋をつくる」という目標を掲げ、開設の準備が各地で進んでいる。助成金は、寺子屋の新設に向けて交通費や人件費に使われるという。

大石さんは「地域に根付いた寺子屋を全国に作っていく。地域と一緒に子どもたちを育て、自分のやりたいことに自分で進んでいく能力を伸ばしていきたい」と意欲を語った。

(第3種郵便物認可)

子どもの健全育成に取り組む団体

読売

自信つけて自立の一步

子どもの健全育成に取り組む団体を支援する、読売光と愛の事業団の今年度の「子ども育成支援事業」に、県内から守山市の認定NPO法人「四つ葉のクローバー」が選ばれた。児童養護施設の卒園者らが一人暮らしを体験できる「ステップハウス」の家賃などに50万円が充てられ、同法人の杉山真智子理事長(62)は「子どもたちのスムーズな自立に向け、失敗してもよい練習の場としたい」と意欲を燃やしている。

杉山さんは2013年、家庭で虐待を受けるなどして児童養護施設で過ごした子どもたちが、共同生活を送りながら将来を考える自立援助ホームを守山市内に開設。1人当たり平均約1年半暮らし、これまで計29人が巣立っていった。

ただ、慣れない一人暮らしを始めても多くはまだ心の傷が癒えず、仕事が長続きしな

光と愛の事業団 助成 守山の「四つ葉のクローバー」



ステップハウスの空き部屋で「子どもたちが自立を体験できる場」と話す杉山さん(守山市)

かったり引きこもりだったり、生活に困り社会的に孤立するケースも目立った。そこで19年、法人が契約者となってホームに近い場所に部屋を借り、一人暮らしを体験できるステップハウス事業を始められた。現在、市内に3部屋あり、20歳の大学生ら2人が住む。「例えば、ごみの出し方や

養護施設卒園後 1人暮らし体験支援

買物の仕方が分からない子どもは、1人で生きていくことの難しさを実感する。逆に、指導員のアドバイスを受け、徐々にそれらができて自信につながる場合もある。自分としっかり向き合い、そうした成功体験を持つ場には」と杉山さん。助成金は入居者1人の家賃と指導員の人件費に役立てるといふ。

杉山さんが自立援助ホームを始めたのは、かつて市内の児童養護施設で子どもたちと遊ぶボランティアをしたことがきっかけだった。養育里親の資格をとり、幼稚園児を自宅に招き、一緒に寝ていた時。男児がむせび泣きながら「おばちゃんの子どもに生まれたかった」と言った。抱きしめて「大きなおうちを作って待ってるから」と告げたのだ。

あれから十数年たち、多くの子どもたちと出会った。「人を信じられなくなった子どもたちと信頼関係を築くには時間がかかる。しっかりと大人に育て、社会に彼らを還元していくことが使命だと思っています」